日本民家園だより

特集「旧鈴木家住宅」

vol.72

企画展示「宿場の家」……－奥州街道・鈴木家－
2010年1月5日（火）～5月30日（日）
『日本民家園収蔵品目録13　旧鈴木家住宅』刊行

写真：旧鈴木家住宅（神奈川県重要文化財）

宿場の家―奥州街道・鈴木家―

はじめに

旧鈴木家住宅は、福島県福島市松川町本町より移築されました。昭和45年（1970）9月解体、46年（1971）3月に復原されています。建物は、表側の揚戸・座敷の格子窓・軒のせがい造など、江戸時代後半の典型的な宿場建築の姿を残しており、昭和47年（1972）11月には神奈川県の重要文化財に指定されました。棟札等は発見されていませんが、土台が用いられていること、柱がすべて鉋で仕上げられていることなどから、建築年代は19世紀初期と考えられています。

ここでは生業のことを中心に、鈴木家の暮らしについて紹介しましょう。

八丁目宿

鈴木家のあった松川町は、かつて「八丁目宿」と呼ばれ、いわゆる奥州街道の宿場町として栄えていました。江戸から数えて49番目の宿場です。幕末の状態に近い明治12年（1879）の調査によれば、総戸数334戸のうち、農業は165戸、宿屋・貸席が47戸、商業70戸、職人等が51戸で、このほか銭湯まであったことがわかっています。

鈴木家はこの宿場の中心部にあり、「馬宿」を営んでいました。

馬宿とは

馬宿とは、馬を売りに行く馬喰や、馬で荷を運ぶ馬方などを、馬と一緒に泊めた宿屋のことをいいます。同じ福島県内の白河（福島県白河市）と本宮（福島県本宮市）では、それぞれ毎年2回、馬市が開かれていました。この馬市に出品するために、馬喰たちが馬を連れ、南部地方の産地から奥州街道を上ってきたのです。八丁目宿はちょうどあと少しという場所に当たっていましたから、中にはここまで来て宿賃が尽き、前借りする客もいたといいます。そうしたときは白河の馬市までついて行き、代金をもらったそうです。宿賃は明治20年（1887）頃で、人と馬を含め1泊1円50銭でした。

裏から見た鈴木家（昭和45年）

現在の八丁目宿（一番手前が鈴木家）

昭和45年当時の八丁目宿（車のとなりが鈴木家）

馬宿は街道沿いに点在していましたが、普通の宿屋に比べ数は多くなかったようです。八丁目宿ではともに「赤浦屋」を名乗る鈴木家と隣の本家の2軒、近くではほかに、二本柳宿（二本松市油井）に1軒ありました。

家の中の様子

鈴木家の大戸をくぐって中に入ると、裏の戸口まで長い土間が続いています。入ってすぐ左手が「ミセ」と呼ばれる部屋です。馬宿時代は帳場として使われた場所でしょう。その後、ここを利用して瀬戸物を売った時代もありました。なお、通りに面した開口部は、「シトミ」と呼ばれ、上中下3枚の戸が入っています。これは、いわば江戸時代のシャッターであり、戸を上に収納することで、開口部を広く取れるようになっていました。

このミセの奥に、家族の居住スペースである「ナ

ンド」「チャノマ」「オカッテ」が続きます。そして土間の右手が、馬を泊める「ウマヤ」になっていました。

ウマヤ

馬はウマヤの柱と柱のあいだにつながれました。土間の柱にはそのため、馬のかじった跡が残っていたそうです。このウマヤは1頭あたり幅4尺（約121cm）ほどとして、「フタハンナ」の馬を泊めることができました。「ハンナ」という言葉は手綱（たづな）のことを指しますが、馬を数える単位としても用いられます。ヒトハンナは7頭ですから、鈴木家では14頭の馬を主屋の中に泊めることができたわけです。ちなみに、昔は1人でヒトハンナ以上の馬を連れて往来することは禁じられていたといいます。なお、鈴木家には裏手にも別にウマヤが設けられ、主屋に入りきらなかった馬を泊めていました。馬宿（うまやど）をやめたあと、この小屋はヤギやヒツジを飼うのに使われていました。

馬宿（うまやど）では馬の世話一切をしました。餌（えさ）は梁（はり）から吊した飼葉桶（かいばおけ）で与え、地面は自然にくぼんでくるため、そこに敷わらを敷いていました。

客間

一方、客の泊まる部屋は、ナンドのとなりと二階にありました。

ナンドのとなりには2部屋あり、通りに面した部屋を「ジョウダン」、庭に面した部屋を「ツギノマ」と呼びます。いずれも天井が張られ、ジョウダンには床の間も設けられていました。ウマヤにつないだ馬は、夜になると鳴くことがあります。そんなとき、この部屋に泊まった馬喰（ばくろう）が寝ながら咳払いをすると、馬はそれだけで大人しくなったといいます。この2間は馬宿（うまやど）をやめた後も客間として扱われ、家族が寝起きすることはなかったそうです。

イロリ周辺（昭和45年　左手奥が大戸）

二階の座敷（昭和45年）

二階にも部屋が2つありました。民家園では移築にあたって建築当初の姿に戻すという方針を採っていますので、現在は天井のない物置のような部屋として復原されています。しかし、営業していた時代は座敷に改造され、2間とも天井が張られて床の間も設けられていました。

宿場と女郎（じょろう）

話は少し飛びますが、八丁目宿には官許の遊郭がありました。盛時には600人もの女郎（じょろう）がいたと伝えられています。鈴木家は宿屋でしたので、客の求めがあれば遊郭から女郎を呼び、二階に泊めることがありました。客のもとに赴くこうした女郎のことを、「揚女郎（あげじょろう）」と言います。求めがあると、女郎は供に布団を持たせて来ました。供のいない女郎は布団を自分で背負ってきたり、あるいは迎えに来た鈴木家の主人に背負ってもらったりしました。こうしたとき、女郎は宿に着くと「御苦労様」と声をかけ、鈴木家の主人が供であるように見せたといいます。そうすることで客への体裁を繕ったわけです。

おわりに

鈴木家が馬宿（うまやど）を廃業した正確な時期はわかりません。しかし、馬と人両方を泊めていたのは明治20年代ぐらいまでのようです。その後は、人の方は近くにあった別の宿屋に泊まってもらい、馬だけを預かるようになりました。こうしたことも昭和の初めごろにはやめ、宿泊業から離れたようです。

鈴木家には田畑があり、馬宿（うまやど）時代も含め、長く農業を営んできました。作物や品種は時代とともに移り変わっていますが、現在も米を中心に栽培を続けています。

（渋谷卓男）

鈴木家住宅関係資料

チャノミヂャワン

ソバヂョコ

手あぶり
暖房用。中に炭火を入れた。

イトワク
紡いだ糸を巻き取るのに使われた。

ベンケイ
串刺しの魚をさして囲炉裏のそばに吊し、燻製にした。

アオ
米や麦の脱穀に使われた。

タンガラ
堆肥・野菜などを担ぐのに使われた。

神棚

日本民家園だより　vol.72　発行：平成21年12月10日

川崎市立日本民家園　URL　http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm
〒214-0032　川崎市多摩区枡形7-1-1　TEL　044(922)2181　FAX　044(934)8652　交通:小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分
開園時間　[11～2月]午前9時30分～午後4時30分　[3～10月]午前9時30分～午後5時　入園は閉園30分前まで
休 園 日　毎週月曜(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土・日曜の場合は開園)、12月28日～1月3日
入 園 料　一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円(川崎市在住の方無料)、中学生以下無料